困難な時こそ、小さなチャレンジを!

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを私たちは知っています。」 (ローマ人への手紙8章28節)

過日の週末は台風通過の影響で、いわゆる線状降水帯が発達し、各地に大きな被害と混乱を及ぼしました。実は、私自身も神戸に出張していたために、新幹線が動かずに足止めされ、夜遅くの帰着となりました。

しかしながら、困難の中にも、主なる神は万事を益とし、必要な備えを用意していて下さることを学びました。・・・そんな足止めされた関西で、前々から一度訪れてみたいと思っていた世界遺産に行くことができたのです。クフ王のピラミッド、秦の始皇帝陵と並ぶ「世界三大墳墓」の一つ、仁徳天皇陵墓(最大の前方後円墳)です。

実は、ようやく夕方発の新幹線の切符が取れたものの、残された時間はわずか二時間半でした。普通に考えますと、かなり冒険なのですが、世界遺産に呼ばれているように勝手に思い込み、チャレンジしてみました。そうしますと、乗り継ぎもスムーズに行き、無事に、そして、有意義に見学を終えることができたのです。

ちなみに、当初、イライラして遠くの景色さえ眺めることもできない、うつむき加減の私でしたが、神はそんな私にこんなこともして下さいました。・・・うつむく私の至近距離に突然、人が立ちはだかったのです。迷惑だな、という思いで、顔を上げますと、その方のカバンが私の目に飛び込んできました。そこには英語でこう書いてありました。"Learn from yesterday. Live for today. Hope for tomorrow." 直訳すれば、「昨日から学び、今日をこそ生き、明日のために希望を持ちなさい。」とでもなるでしょうか?そこで、私は今日を生きようと、小さなチャレンジをしたのです。

「私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。」 (詩篇 119 篇 18 節)

いよいよ六月、梅雨の季節です。雨も多く、湿度があり、いわゆる不快指数の高い日々が続くことになります。気持ちも滅入りがちではないでしょうか?ただ、「恵みの雨」という表現がありますように、雨もまた、私たちに必要な恵みであることをも前向きに覚えたいものです。

ワーズワースの言葉 "April shower brings May flowers."、直訳すれば「四月の長雨が五月の花々をもたらす」。日本の文脈で意訳すれば、「六月の梅雨が八月のスイカをもたらす」とでもなるでしょうか?転じて、試練が後の祝福を運んで来る、という意味です。と同時に、雨が無ければ、花々も、スイカもあり得ませんので、この言葉はある意味、雨の必要性をも訴えているのではないでしょうか?

こんな話があります。あるお婆さんには、二人の息子がいました。一人は 傘屋で、一人は靴屋。ある日、雨が降っていました。するとお婆さんは「コ マッタ、コマッタ」の連発です。近所の人が聞きます、「お婆さん、どうし たの?」。すると、お婆さんは言います。「こんなに雨が降ったら、靴屋の息 子が儲からないよ」。・・・次の日は昨日までの雨が嘘のように晴れました。 しかし、お婆さんはやはり「コマッタ、コマッタ」の連発です。また、近所 の人が聞きます。「お婆さん、一体、どうしたの?」。すると、お婆さんは言 います、「こんなに晴れたら、傘屋の息子が儲からないよ」。

私たちの人生には、マイナスもあれば、必ずプラスもあります。どこに目を留めるか、が大切なのではないでしょうか?世界の「ホームラン王」ベーブルースは「三振王」でもありましたが、彼はそのホームランの数にこそ、目を留めたのです!

私たちが目指すべきは・・・キリストのような教会!

「私にとって、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」 (ピリピ人への手紙1章21節)

本日(5/28)は、いわゆる教会暦で言うところの「ペンテコステ(聖霊降臨日)」 に当たります。言うなれば、それは教会の誕生日です。西暦の数え方に誤差 があるようですが、それをさて置けば、"教会"は創立2023年ということに なるでしょうか?ちなみに、我らが「御茶の水キリストの教会」は今年、創 立75年になります。

ところで、御茶の水キリストの教会の創立に大きく関わった O. D. ビクス ラー兄は、単に、カギカッコ付の「キリストの教会」を求めていたのではなく、まさに、自らが、そして、教会が、キリストのようになることを求めていたのではないでしょうか? そんなビクスラー兄のモットーは「クライスト・センタード(キリスト中心主義)」です。

おそらく聖書復帰運動の先駆者たちも、同じように、決してカギカッコ付 の「キリストの教会」を求めていたのではなく、まさに、自らが、そして、 教会が、キリストのようになることを求めていたのではないでしょうか?

ならば、私たち御茶の水キリストの教会も、カギカッコ付きの「キリストの教会(Church of Christ)」というよりも、むしろ、「キリストのような教会(Church like Christ)」をこそ目指すべきでしょう。そして、それが本来の「キリストの教会」の目指すべきところなのではないでしょうか?

パウロはなぜ、「生きることはキリスト」と言い、ビクスラー兄はなぜ、「クライスト・センタード」をモットーにしたのでしょうか?それは、彼らがキリストの愛をしっかりと感じていたからに他なりません。ゆえに、それに大いに応えようとしたのです。あたかも名医によって大病を克服した子がお医者さんになりたい、と言う如くに。

「心の貧しい」とは?

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」 (マタイの福音書5章3節)

先日、学園の高等学校・中学校で行なわれている放送礼拝(全体で8分間、 お話は正味4分弱)で、細川知正長老が学園総長として、こんなメッセージ をして下さいました。「心の貧しい」を、以下のように分かり易く説明され たのです。 ※ 文責は野口

日本語のイメージですと「心の貧しい」とは、ともすると「卑屈である」 とか「心が狭い」というようなネガティブな意味に捉えかねません。しかし ながら、聖書的な表現としては、少し違ったニュアンス、より肯定的な意味 があるのではないか、という訳です。すなわち、聖書的な意味での「心の貧 しい」というのは、「必ずしも心がいっぱいいっぱいではない」、「心にそれ なりの隙間や余裕がある」という意味だ、というのです。

「空腹は最良の調味料」などと言われますが、お腹がいっぱいであれば何を食べても美味しく感じないかもしれません。もう何も受け付けられません。しかしながら、空腹であれば、正直、何を食べても美味しく感じるのではないでしょうか?まだまだ食べ物を受け付けられるはずです。・・・それとやや似たような意味で、私たちの心が自分自身の心配事や雑事などでいっぱいになり過ぎていますと、他の人の悩みを聴くどころではなくなってしまうのではないでしょうか?逆に、主にあって心の中が整理されており、そこに少しでも余裕があるのであれば、自分以外の方のことを心配したりする可能性が出て来るのではないかと思います。

「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。」(ピリピ人への手紙 2章4節)。願わくば、私たちは時に、少しでも「心を貧し」くしたいもので すね。 あなたは御国の到来のために何ができるのか?

「御国が来ますように。」 (マタイの福音書6章10節前半)

先日、茨城は水戸キリストの教会を会場にして行われた「キリストの教会・春季合同礼拝」には、久しぶりに対面でも多くの兄弟姉妹が参加し、良き学び、良き交わりの時となりました。

今回の合同礼拝の説教者は、学生時代に水戸キリストの教会で信仰生活を送った大阪聖書学院(=有楽器派の神学校)の学院長である岸本大樹兄でした。岸本兄は、上掲のみことばから、おおよそ次のように語られました。すなわち、御国=神の国とは、必ずしも、死後の天国のこと(だけ)を意味するのではなく、この地上における神の支配のことでもある。そして、そんな神の支配は、主の導きのうちに私たち信仰共同体である"教会"が実現していくものである。もちろん、私たち"教会"には欠けも問題もあるが、それでもなお、みこころを求めて、「御国が来ますように」、つまり、地上でも神の支配が実現するように、でき得る最善を為し遂げていきたい・・・と。

かつて、あのジョン・F・ケネディがアメリカ大統領に就任した際、彼は アメリカ国民に向けてこう語ったそうです。「アメリカという国があなたの ために何をしてくれるのかを問うのではなく、あなたがアメリカという国の ために何を為すことができるのかを問うて欲しい」。後に、ケネディ大統領 の名言となった言葉です。

もちろん、この地上における神の支配としての御国=神の国は、私たちに対して素晴らしいことを成し遂げてくれるという面もあります。と同時に、私たちがそんな御国=神の国の建設、地上における神の支配の実現や拡大のために為すべきことがあるということも覚えたいと思います。・・・御国が自分のために何をしてくれるのかを問うだけでなく、自分が御国のために何を為すことができるのかを問いたいものです。

ゴールデン・ルールは終わらない

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」 (マタイの福音書7章12節)

大型連休 "ゴールデン・ウィーク" がまもなく終わろうとしています。そして、その後にやって来ると言われるのが、いわゆる「五月病」です。

「五月病」とは、医学的な病名ではなく、五月の連休後に憂鬱になったり、 体調が優れなかったり、学校や会社に行きたくなくなる鬱的な気分に見舞われる症状のことを言うようです。以前は大学の新入生や新入社員など比較的 若い人に見られる現象でしたが、昨今は転勤や転職、部署異動など、環境が 変わったばかりの中高年にも増加傾向にあるようです。

ちなみに、しばらく前のことになりますが、五月に行なわれた義母の告別 式が行われた斎場が思いのほか閑散としていたので、「この時期はお葬式が 少ないのですか」と斎場の職員さんに聞いたところ、次のような答えが返っ てきたことを思い出しています。「そりゃそうですよ、今は田植えの時期で すから・・・」。すなわち、お年寄りの方々も一家総出の田植えの時期は大 いに必要とされているので、亡くなる人が少ないというのです。人は、為す べきことがある、必要とされている時に、より生き生きとなるのではないで しょうか?

私たちキリスト者は、神の愛を知る者として、与える愛に生きることが大いに期待されているのではないでしょうか?まさに、「主がお入用なのです」。ちなみに、与える愛の教えが説かれている上掲のみことばは、人呼んで"ゴールデン・ルール(黄金律)"。ゴールデン・ウィークは終わっても、そんなゴールデン・ルールは終わらないのです。

新緑と花々の季節に想う

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」 (詩篇 19 篇 1 節)

「・・・野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、 紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソ ロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。き ょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装って くださるのだから、まして、あなたがたに、よくしてくださらないわけがあ りましょうか。・・・」 (マタイの福音書6章28~30節)

新緑や花々の大変美しい季節となりました。ぜひ、この季節、可能ならば、神様の創造されたみわざとしての自然をじっくり味わいたいものです。

ところで、黒板と言っても実際には深緑色だったり、青信号と言っても実際には緑色であるのは、基本的に緑色が目に優しい色だからだと聴いたことがあります。天地万物の創造主なる神様は、そんな目に優しい緑色を多用して世界や自然を創造して下さったのではないでしょうか?

また、野の花々を美しく成長させて下さる神様は、花々以上に、私たち一人一人をも顧み、麗しく成長・成熟させて下さるというのです。「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい」(マタイ6章31節)と、主は言われます。

もちろん、私たちが何もしなくていい、ということではありません。それ ぞれにできることをさせていただきましょう。結果は神様にお委ねして・・・。 「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です」 (第一コリント3章6節)。

主の手足は傷ついている!?

「また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。む しろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の 器として神にささげなさい。」 (ローマ人への手紙6章13節)

私が四十年前の青年時代によく歌ったゴスペル・フォークに「主の手足に なろう」という歌がありました。歌詞は下記の通りです。

- 1. みんなで ともに祈ろう 日本の リバイバルを 主の心は 火でもえている みんなで もやされよう※ おしみなく与えた主に おしみなくささげよう(2回)
- 2. みんなで 十字架をとろう 世界を 救うために 主のみ手は 傷ついている みんなで 主の手になろう ※ (くり返し)
- 3. みんなで 伝道しよう 福音を 満たすために 主の足は いたんでいる みんなで 主の足になろう ※ (くり返し)

ここで歌われておりますように、ある意味、主の御手、主の御足は、私たちの救いのためにこそ傷ついているのです。であれば、私たちキリスト者は、救われた者として、その救いの恵みに応えつつ、微力ながらも、キリストの傷ついた御手、傷ついた御足の代わりに、私たちの手、私たちの足を主なる神にこそおささげしようではありませんか?日本のリバイバルのために、主の働きのために・・・。

主なる神は、私たちの手、私たちの足を私たちの思いを越えて、尊く大き くお用い下さるのです。必要以上に躊躇せずにおささげしましょう。「主が お入用なのです!」

ファックス・ブラザーズ

「幻がなければ、民はほしいままにふるまう。しかし律法を守る者は幸いである。」 (箴言 29 章 18 節)

戦後の茨城で尊い働きをされた兄弟宣教師、人呼んで"ファックス・ブラザーズ"。先日、百歳にして天に召された弟ローガン・ファックス兄が夢とリーダーシップの人で、主に学園中心に働かれたのに対して、兄ハリー兄は愛と信仰の人で、学園での働きと共に、茨城のキリストの諸教会で尊い働きをなし、大きな影響を与えました。

第ローガン兄は、茨城キリスト教学園の創立当初、学生・生徒たちを原 野のようなキャンパスに連れ出しては、目をつぶらせて言いました。「ほ ら見えるだろう。素敵なチャペル、立派な図書館、そして、林立する校 舎群・・・」。その当時、現実には建物らしき建物はほぼ何もありません でしたが、その七十年後の今、キャンパスを見回せば、ローガン兄の言 った通りになっています。ローガン兄は若者たちに「学生・生徒よ、夢 を抱け!」と言いたかったのではないでしょうか?

一方、ハリー兄は、ある日、学園の聖書の授業の際に学生たちからこんな 批判を浴びたそうです。「日本人が貧しい生活をしている中で、アメリカ人 宣教師たちはいい洋服を着て、美味しい食事まで食べて、その上、車にまで 乗っている。それで愛とは何事か!」。ハリー兄は全く言い返すことなく、 うつむいたまま微動だにせず、その下にあった聖書には涙さえこぼれ落ちた と言います。・・・一週間後の授業になかなか現われなかったハリー兄はか なり遅れて、なんと自転車で学園に到着し、もんぺ姿でした。そして、お弁 当はいわゆる日の丸弁当です。しかも、車は売却したとのことでした。なお。 後日談として、学生たちは自分たちの言動を恥じて、ハリー兄に車を買い戻 してもらったそうです。みことばに忠実であろうとするハリー兄のお人柄が 偲ばれます。

置かれた場所で咲きなさい!

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」 (箴言3章6節)

年度初めのこの時期は、環境が変わるという方も少なくないのではないで しょうか?そして、往々にして、環境の変化は私たちを大いに不安にさせる ものです。

そんな私たちに、聖書は「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ」 と語り掛けます。仮に環境が変わったとしても、そこで天地万物の創造者に して、全知全能なる神を見上げ、絶対者である神の御手の働きを認めていく のであれば、主なる神は私たちの歩むべき道を「まっすぐにされる」(=歩き やすくして下さる)というのです。

しばらく前にベストセラーになりました、シスター渡辺和子さんの『置かれた場所で咲きなさい』という本があります。その本の中でシスターは、「置かれた場所こそが今のあなたの居場所なのです。そこであなたなりの花を咲かせる努力をして下さい。仮に、どうしても咲けない雨の日や風の日は、根を下に伸ばすことをしてみて下さい。やがて咲く花がより大きく、より美しくなるように・・・」と述べています。

置かれた場所で咲くということは決して、単なる諦めではありません。むしろ、より良い生き方の秘訣なのではないでしょうか?・・・こんな言葉があります。「過去と環境は変えられないが、未来と自分は変えられる」。であれば、私たちは変えられない環境を無理やりに変えようとするのではなく、置かれた場所、その与えられた環境で、主にあってベストを尽くしつつ、自分なりの花を咲かせたいものです。

もしかすると、私たちは他の花々が気になってしまうことがあるかもしれません。しかしながら、必要以上に他の花々を意識せずに、主にこそ喜ばれる、世界に一つだけのあなたの花、私の花、オンリー・ワンの花を咲かせようではありませんか?

~主よ、どこにおいでになるのですか?~

「シモン・ペテロがイエスに言った。『主よ。どこにおいでになるのですか。』 イエスは答えられた。『わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることが できません。しかし後にはついて来ます。』」(ヨハネの福音書 13 章 36 節)

コンビニなどで使ったりするプレペイド・カードの一つに「QUO(クオ)カード」があります。ちなみに、「QUO(クオ)カード」の「QUO(クオ)」は元来、ラテン語で「どこに?」を意味する疑問詞であり、また、いわゆる関係代名詞でもあります。なお、「QUO(クオ)カード」のホームページには、ラテン語「QUO(クオ)」の用例として、上掲・ヨハネの福音書 13 章 36 節の「主よ、どこにおいでになるのですか?([ラテン語]クオ・ヴァディス・ドミネ)」が引用されています。ペテロが主に問うた質問です。

実は、そんなペテロの問い「主よ、どこにおいでになるのですか?([ラテン語] クオ・ヴァディス・ドミネ)」は、ポーランド出身のノーベル文学賞作家へンリク・シェンキェヴィチの代表作「クオ・ヴァディス」のタイトルにほぼそのまま使われています。

この歴史小説の中で、ペテロは未練を残しながらも、暴君ネロの迫害下のローマを離れるのですが、その途上、アッピア街道をローマに向かおうとする主イエスを見かけ、思わず問いかけます。「主よ、どこにおいでになるのですか?([ラテン語]クオ・ヴァディス・ドミネ)」。すると主は、そんなペテロに、「お前がローマを見捨てるなら、私はローマに行き、もう一度十字架に架かる必要があるのだ」と答えたのでした。それを聞いたペテロは踵を返して、ローマへと向かい、そこで主と同じ十字架では申し訳ないと、逆さ十字架に架かる・・・そんなストーリーになっています。

私たちもまた、キリストを再度、十字架に向かわせてはいないでしょうか?

大事には一致を、小事には自由を、そして、全てには愛を!

「最後に申します。あなたがたはみな、心を一つにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。」

(ペテロの手紙第一3章8節)

私たち「御茶の水キリストの教会」は、より大きな目で見れば、"キリストの教会(Church of Christ)"という群れに属しています。歴史的には、「聖書復帰運動(Restoration Movement)」、昨今はその先駆者の名前から「ストーン=キャンベル運動」と呼ばれる、19世紀初頭にアメリカで起こった教会改革運動が発端になっていると言われています。その運動の初期の指導者たちには、バートン・W・ストーン、トーマス・キャンベル、アレキサンダー・キャンベル、ウォルター・スコットといった先駆者たちがいました。彼らは、聖書に示されているキリストの教えに立ち返ることによって、キリスト者たちが一つになることを希求したのです。

新大陸アメリカに乱立していたプロテスタント諸教会、例えば、長老教会、 改革派教会、メソジスト教会、バプテスト教会などの有志のキリスト者が、 主にある一致を目指しました。もちろん、諸教会間には様々な違いがあった 訳ですが、それらを乗り越えて、紆余曲折あっと思いますが、一つになろう としました。そこには現在の私たちの想像を絶する祈りや信仰の取り組みが あったのではないでしょうか?

聖書に立ち返ることによって、主にある一致を目指した、そんな教会改革 運動において、大切にされた精神があります。それが「大事には一致を、小 事には自由を、そして、全てには愛を!」というものです。大枠では基本的 な一致、主にある一致を目指しつつ、些細な部分ではそれぞれの自由をある 程度許容し、そして、全ての点においてキリストの愛は決して欠かさない、 という姿勢です。まさに今、多様性の時代における私たち「御茶の水キリストの教会」にも必要な精神なのではないでしょうか? 「ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。・・・それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。・・・もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分か尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」

(コリント人への手紙第一12章12、22、26節)

今年の御茶の水キリストの教会の年間テーマは「キリストの身体なる教会」であり、その主題聖句はローマ人への手紙 12 章 4~5 節です。併せまして、ぜひ、上記で抜粋したコリント人への手紙第一12 章 12~26 節もお読み下さい。「キリストの身体なる教会」のあり方がとてもよく示されています。

ちなみに、2023 年度の教会学校のテーマは、子供たちに分かり易いように「みんなちがって、みんなたいせつ」とさせていただきました。金子みすぶさんのあの有名な詩がその背景にあることは言うまでもありません。ただ、私たち人間は元来、罪人であり、必ずしも完全ではありません。ゆえに「みんないい」とは言い切れませんが、そんな私たち一人一人は、神の愛ゆえに「いい(良し)」とされた存在であり、それゆえに私たちは互いに赦し合い、愛し合い、受け入れ合っていきたいのです。

身体の器官には、それこそ多様性がありますが、それは決して優劣ではありません。そのことを私たちはしっかりと弁えたいと思うのです。ゆえに、御茶の水キリストの教会に、不要な存在は一人もおりません。「みんなちがって、みんなたいせつ」であり、「それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならない」ことを覚えましょう。・・・御茶の水 "切り捨て" の教会にならないために!

「そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。今日でも、『主の山の上には備えがある。』と言い伝えられている。」

(創世記22章14節)

「・・・たたきなさい。そうすれば開かれます。」

(マタイの福音書7章7節後半)

先日、茨城キリスト教大学で行なわれた卒業記念礼拝の第二部で、卒業生で、現在、「キャミオ・コーヒー・カンパニー」というカフェでオーナー・バリスタをされている直井道姉妹が、後輩である今年度の卒業生に向けて、自分の経験から激励の講話をして下さいました。直井姉妹のアフリカはウガンダにおける海外青年協力隊時代の経験談から始めて、現在のお仕事をするに至るまでの道のりをスライド等を駆使して分かり易く説明して下さいました。そして、そこには多くの挫折や壁もあったのですが、それ以上に可能性の扉(ドア)が用意されていて、直井姉妹はそれらを一つ一つノックし、開いてきたと言います。

そんな直井姉妹の講話のタイトルは「どこでもドアではなくて・・・」というものでした。残念ながら、私たちの人生には、ドラえもんの"どこでもドア"のような便利なものはありません。しかしながら、そこには、私たちの思いをも越えた神様の備えの扉(ドア)がいくつもあるのではないでしょうか?

主の山に備えあり!・・・神様は、直井姉妹に限らず、私たち一人一人にも備えの扉(ドア)を用意していて下さいます。ぜひ、そのような扉(ドア)を、霊的な目を見開いて目ざとく見つけ、しっかりとノックして(たたいて)、開いていきたいものです。この年度末/初めは変化の時・・・あなたに備えられている扉(ドア)が必ずあるはずです。

"どこでもドア"はありません。でも、主にあって、ドアはどこにでもあるのです!

夕暮れ時(夜)に始まる物語

「・・・夕暮れ時に、光がある。」 (ゼカリヤ書 14 章 7 節後半)

聖書の物語は往々にして、夕方や夜から始まります。なお、ここで言う"物語"とは、決して「架空の物語」という意味ではありませんので、くれぐれも誤解のありませんように。

たとえば、マルコの福音書4章35節にはこうあります。「さて、その日のこと、<u>夕方になって</u>、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸に渡ろう。』と言われた。」。このお話も夕方から始まっています。あるいは、マタイの福音書14章25節にはこうあります。「すると、<u>夜中の三時</u>ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。」。このお話における大きな展開は夜も夜、夜中の三時に始まるのです。

もしかしたら、皆さんの中には、人生の"夕暮れ時"や人生の"夜"を感じている方がおられるかもしれません。年を重ねて、そう思っている方もいるかもしれませんし、あるいは、大きな試練の中、お先真っ暗という思いで、そう感じてしまっている方がいるかもしれません。

しかしながら、いずれの場合の"夕暮れ時"や"夜"であっても、≪主の物語≫は必ず始まるのです。上記で引用しました聖書箇所は、いずれもガリラヤ湖での航海の場面ですが、そんな航海にはイエス・キリストが同船して下さっていたり、あるいは、イエス・キリストが近付いて来て、その船に乗り込んで下さっているのです。

あなたの"夕暮れ時"の航海にも、私の"夜"の航海にも、イエス・キリストは必ず同船して下さるのです。そして、私たちが自分という舟、教会という船に主が同船して下さっていることに気付く時、人生の航海における嵐は主によって凪へと変えられるのではないでしょうか?・・・だから、夕暮れ時にも、希望の光があるのです!

小さいものを大きく用いられる主

「ギデオンは言った。『ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができましょう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。』」 (土師記6章15節)

上掲の聖句は、ギデオンがイスラエルの民をミデヤン人の手から救い出すべく主の召しを受けた時の反応です。ギデオンは「私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若い」と、その小ささを大いにアピールしております。

しかしながら、現代の読者である私たちは、そんな一見小さなギデオンを、 主なる神が大きく用いられ、かつ、まさに、少数精鋭で敵の大軍を打ち破ら れたという結末を知っているのではないでしょうか?そう、主は、小さいも のを大きくお用いになられるのです。

男性だけで五千人もいた大群衆の空腹を満たしたのは、一人の名もなき少年が際出したと思われる彼のお弁当、すなわち、たった"五つのパンと二匹の魚"でした。それを主は、少年や弟子たちの思いをはるかに超えて、大きく大きく用いられたのです。

私たちや私たちの賜物においても、同じことが言えるのではないでしょうか?私たちが主の前に差し出す小さな私たち自身や私たちの賜物を、主はそれはそれは大きく用いて下さるのです。

讃美歌・第二編26番の歌詞(1節)にある通りです。

「ちいさなかごに花をいれ、さびしい人にあげたなら、

へやにかおり満ちあふれ、 くらい胸もはれるでしょう。

(おりかえし)

あいのわざはちいさくても、 かみのみ手がはたらいて、 なやみのおおい世のひとを あかるくきよくするでしょう。」

賜物は・・・出し惜しみせずに!

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理 者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」

(ペテロの手紙第一4章10節)

似て非なる言葉に「才能」と「賜物」があります。英語にすれば、いずれも "talent" だったりするのですが、私は主観も込めて、次のように使い分けております。

どちらかと言えば、「才能」は自分のものとして、自分の為にのみ使うもの。時に、それはひけらかされます。ゆえに、「能ある鷹は爪を隠す」と戒められる訳です。

それに対して、「賜物」は"読んで字の如く"、恵みとして神から賜わったものであり、願わくば、それは自分の為のみならず、他者の為にこそ用いられるべきではないでしょうか?ちなみに、「賜物」は英語で"talent"に加えて、"gift"(贈物)と表現されることもあります。

さて、上掲の聖句で、使徒ペテロは、そんな賜物の「良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい」と勧めております。ことに、キリストを頭(かしら)とする、キリストの身体なる教会にあって、私たちキリスト者一人一人は、その一部として、その一器官として、自分に与えられている賜物を発揮して、それぞれの分(役割)を果たしつつ、互いに仕え合いたいものです。

自分の為だけに使う「才能」は、ある意味、「能ある鷹は爪を隠す」と言 われますように、それなりに謙虚に隠してもよろしいかと思います。しかし ながら、神から賜わった恵みとしての「賜物」は、むしろ、決して出し惜し みすることなく、大いに分かち合うべきではないでしょうか?

もし、あなたが目ならその視力を、耳ならその聴力を、腕ならその腕力を、 足ならその脚力や走力を、身体全体の為に、そして、主の為に存分に発揮致 しましょう! 「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」 (ローマ人への手紙8章28節)

先日、閉幕したテニスの四大大会の一つ、全豪オープン車イスの部で、若 干 16 歳で準優勝した小田凱人選手をご存知でしょうか?小田選手はあの車 いすテニス界のレジェンドにして、世界ランキング一位のまま引退を表明し た国枝慎吾選手にあこがれる、「ポスト国枝」の呼び声の高い、車いすテニ ス界のホープです。

小田選手は元々、プロ・サッカー選手になりたかったそうですが、九歳の時に骨肉腫を発症し、泣く泣くそれを断念。何度か再発などもあり、大いに苦しみ、挫折しますが、決して諦めることなく、最終的に今できることをやろうと、国枝選手を目標に車イス・テニスを始めたそうです。本人曰く、これは「神様からの挑戦」なんだと。

そんな小田凱人選手が先日、インタビューに答えている中で、こんなことを言っていました。「うまくいかないが、当たり前!?」。・・・度重なる病気やその再発で夢が叶わず、思い通りに行かない中、むしろ、人生は「うまくいかないが、当たり前!?」なのだという境地になり、そこから始めようと思ったというのです。

確かに、世界はあなたや私を中心に回っている訳ではありません。それゆえ、自分中心の天動説的な考え方から、むしろ、自分も含めて私たちは皆、神の回りを回っているのだという地動説的な考え方への転換こそが必要なのではないでしょうか?「うまくいかないが、当たり前!?」。じゃそこから始めよう!という姿勢です。そのような心のコペルニクス的転回が、私たちの想定外を想定内にし、いじけからやる気へ、諦めから求めへ、挫折から再出発へと、私たちを突き動かしてくれるのです。

弱さのうちに立ち上がる!

「この後、イエスは出て行き、収税所にすわっているレビという取税人に目を留めて、『わたしについて来なさい。』と言われた。するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。」 (ルカの福音書5章27~28節)

上掲の聖句は、レビ=マタイの召命の記事です。主イエスは「収税所にすわっているレビ」に目を留め、呼びかけられました。この「すわっていた」という表現に、彼の"挫折"を観るのは読み込み過ぎでしょうか?しかしながら、主イエスの「わたしについて来なさい」との召しに「何もかも捨て、立ち上がって」従って行った彼の姿、さらには、その後(29節)に続く彼の大盤振る舞いは、彼が絶望の底になすすべなく座していたことを彷彿とさせます。ちなみに、レビ=マタイが「立ち上がっ」たという部分は、原語のギリシア語では"復活する"をも意味する"アナスタース"という言葉が使われているのです。これはある意味、主の召しによって、新たな使命に立ち上がったレビ=マタイの復活劇なのではないでしょうか?

実は、聖書に登場する神に仕える人たちは、いずれもその弱さの中に神の召しを聴き、それに応えて立ち上がった人たちばかりなのです。・・・信仰の父アブラハムは高齢、行先不明、妻の不妊という三重苦ならぬ三重弱のうちに召し出されました。また、イスラエルの指導者モーセが神の召しを受けたのは、彼が弱みを握られて逃亡していたさ中であり、彼自身「口が重」かった、つまり、口下手を苦にしていた時でした。あるいは、預言者エレミヤはその若さという自信のなさと躊躇の只中に神の召しを聴きました。そして、使徒ペテロは一晩中漁をしても一匹も獲れなかった不漁と徒労、その挫折の現実の中に主の召しを受けたのです。その実例は枚挙に暇がありません。そう、私たちもその弱さのうちに神の召しを聴き、立ち上がることができるのです!

呼ばれていませんか?

「私は、『だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。』と言っておられる主の声を聞いたので、言った。『ここに、私がおります。私を遣わしてください。』 (イザヤ書6章8節)

今年の年間テーマは「キリストの身体なる教会」ですが、いわゆる「教会」 のことを、新約聖書の原語ギリシア語では"エクレシア"と言います。その 原意は「(神に)呼び出された者たち」。つまり、教会とは決して建物ではなく、 キリスト者たちの集まりのことであり、何よりも、そこに集うキリスト者一 人一人は神に呼び出されているのだ、ということになるでしょう。

しかも、私たち一人一人は、それこそ文字通り、その「命」を「使」って与えられた"使命"を為すべく、神に呼び出され、召し出されているのです。 讃美歌・第二編83番には次のようにあります。「①呼ばれています、いつも。 聞こえていますか、いつも。はるかなとおい声だから、よい耳を、よい耳をもたなければ。③召されています、いつも。気づいていますか、いつも。はるかなけわしい道だから、よい足を、よい足をもたなければ。」

もちろん、私たちキリスト者は誰でも、広い意味で「地の塩」、「世の光」 として福音を分かち合うべく遣わされるために、神に呼ばれ、召し出されて いることは言うまでもありません。と同時に、もう一歩進んで、その生涯の 中で一度は、"直接献身"、すなわち、献身して伝道者になる、福音宣教の働 きに直接関わるということを考えてみてもよろしいのではないでしょう か?

預言者イザヤにそう問いかけられた神は、あなたにも同じように問いかけられているかもしれません。「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と。

「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上(のぼ) ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」

(イザヤ書40章31節)

「満を持す」・・・『広辞苑』には「十分に準備を整えて、機会を待ち受けるようす」と説明され、注釈として「『満』は弓をいっぱいに引きしぼることで、その状態を維持しつつ待ち構える意から」ともありました。

こんなお話があります。・・・ある中年のご婦人が初めて、教会の礼拝に 出席しました。説教は難しく、教会もフレンドリーではなかったそうです。 その教会を再訪する理由はほぼ見当たりませんでした。ところが、この女性 は、その教会の礼拝に通い続け、やがて、救われて、クリスチャンになった のです。一体、なぜでしょうか?

後日、そのご婦人が救いの証しで分かち合ったことには、彼女をその教会の礼拝に踏み留まらせた理由が一つだけあったそうです。それは一人の老婦人の存在でした。その老婦人は高齢にもかかわらず、毎週日曜日、欠かさずその礼拝に出席し、いつも一番前の席に座って、笑顔を絶やさず、喜んで讃美し、うなずきながらみことばの説教を聴き、それはそれは礼拝を大切にしていたそうです。その姿を見た時に、このご婦人は、ここには何かがあると思い、その後、その教会の礼拝に通い続けたのでした。

ところで、そんな老婦人は若い頃からとても礼拝を大切にしていた姉妹で、 毎週日曜日の礼拝をそれはそれは楽しみにしていました。礼拝が生きがいだったのです。ですので、少しでも礼拝に出席し続けるために健康を維持する ことを心がけ、何よりも、土曜日の午後になると「断酒」ならぬ「断茶」ま でしたといいます。土曜日の午後からはお茶を飲まない、「お茶飲まず」ク リスチャン!? まさに、「満を持して」教会の礼拝に臨んでいたのではないで しょうか?・・・私たちもその姿勢に倣いたいものです! 「だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。 労苦はその日その日に、十分あります。」 (マタイの福音書6章34節)

英語で "Tomorrow is Another Day." という言葉があります。「明日があるさ」とか「明日は明日の風が吹く」などと訳されることが多いのですが、ある中学生はこの言葉を次のように意訳しました。「今日という日を精一杯生きる」と。つまり、明日は "Another Day"、すなわち、"別の日"になってしまうのだから、「今日」という日はかけがえのない日なのだ。ならば、まずは明日へ期待するよりも、「今日」という日を精一杯生きようではないか、ということなのではないでしょうか?

あの「アメイジング・グレイス」の作詞者で、元奴隷船の船長であった牧師ジョン・ニュートンは、その説教の中でこう語ったそうです。「人が一年に負う心労と面倒なことは、一束の薪にたとえることができる。これを一度に持ち上げるには重過ぎる。しかしながら、神はそんなことを我々にはさせないで、日毎に一本ずつ運べば良いようにして下さるのだ。にもかかわらず、我々はつい、昨日運んだものを再び今日の分に加えたり、さらには、明日の分まで運ぼうとして苦しむ。愚かなことではないか?」。

新しい年、2023年は、まだ始まったばかりです。決して慌てることなく、 簡単に諦めることなく、主にあって、与えられた一日、一日をこそ、じっく りと歩ませていただきましょう。なぜなら、私たちは"明日"も"昨日"も 生きることはできないからです。確実に生きることができるのは、そう、"今 日"だけです!

あの讃美 (聖歌 588 番1節) が聞こえてきませんか?・・・

「主と共に歩む その楽しさよ。 主の踏みたまいし みあとをたどる。 (折り返し) ひと足 ひと足 主にすがりて。 たえず たえず われは進ま ん。」

≪遮断≫の必要性・・・繋がり過ぎ社会の中で

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」 (詩篇 46 篇 10 節)

「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」 (出エジプト記 14 章 14 節)

私自身がアナログ人間で、スマホを持たず、LINE をしないからという訳ではないのですが、現代社会はつくづく「繋がり過ぎ」な社会だと思います。 多くの方々が facebook や Twitter、LINE などの、いわゆる SNS を介して、 場合によっては過剰に繋がっているのではないでしょうか?

もちろん、このコロナ禍においては、それらが功を奏している面も多々あるでしょう。しかしながら、その一方で、もしかしたら、facebook の face が「顔」という意味と同時に「表面」という意味がありますように、やや「表面的」な繋がりになってしまってはいないでしょうか?そして、時に、その繋がりがかえってストレスになることがあるようにも思います。過剰に応答を気にしてしまうことはないでしょうか?

そのような意味において、私たちは時に、いい意味でも悪い意味でも、そういう人間的な繋がり(SNS)を一旦、≪遮断≫して、積極的な意味で、一人になり、むしろ、私たちの主なる神とこそ繋がりたいと思います。上掲のみことばの如くに・・・

ぜひ、静まって、"祈り"という LINE で神と繋がり、私たちの思いの丈を余すところなく、誰にも個人情報を漏らすことのない主にこそツィートしたいと思います。そんな一日一日の積み重ねが、やがて、私たちの『信仰の本(faith-book)』を出版してくれることでしょう。それをいつか、天の御国でじっくりと読み返したいものです。

「キリストの身体なる教会」 (2023年・年間テーマ)

「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」

(ローマ人への手紙12章4~5節 [2023年・年間聖句])

ハレルヤ! 主にあって、明けましておめでとうございます。今年もどう ぞ、よろしくお願い致します。

さて、今年 2023 年は、様々な意味で"節目"の年になるのではないでしょうか?まず第一に、三年間も続いたコロナ禍は今もなお継続していますし、最大限の注意が必要とされることは変わりませんが、いろいろな意味で新しい対処の仕方が始まっているのも事実です。コロナ禍における教会の新しいあり方を共に模索いたしましょう。

また、今年2023年は、1948年を起点とする私たち「御茶の水キリストの教会」の創立七十五周年に当たります。欧米では25年(クォーター[四分の一])ずつの区切り方もあり、今年は教会創立、四分の三世紀になる訳です。私たちの群れである"キリストの教会"の目指すところを改めて、ご一緒に考えてみましょう。

そして、今年 2023 年は、四年に一度行われる、教会の霊的なリーダーである長老選挙開催の年でもあります。この機会に「長老とは何(どういう存在)か」ということを学びつつ、御茶の水のこれからの四年間を霊的にリードする長老たちを、教会を挙げて選出いたしましょう。

そういう訳で、今年2023年は、上掲の聖句・ローマ人への手紙12章4~5節を年間聖句に「キリストの身体なる教会」をテーマに掲げ、私たち御茶の水"キリストの教会"の多様性を理解しつつ、主にある一致をこそ求めて参りましょう。その究極の頭(かしら)がキリストであることを弁え、クライスト・センタードで行きましょう!